

奄美群島の伝統文様の図形化と用途展開に関する研究

山田 淳人*, 上原 守峰*, 恵原 要*, 操 利一**, 中村 寿一***

Study on Illustrating Form and Application of Traditional Patterns of Amami

Atsuhito YAMADA, Morimine KANBARA, Kaname EBARA, Toshikazu MISAO and Toshikazu NAKAMURA

奄美群島は、地理的にも歴史的にも独自の文化を育てており、中でも「針突（はづき）」は、明治初めまで女性の手の甲に施されていた独特な習慣で、これまで脚光を浴びてこなかった。そこで、針突の文様や奄美群島に残る他の文様をデータ化・図形化し、複合利用するなどして新規文様を創出し、奄美群島内の企業と共同で伝統文様を利用した商品開発を行った。

Keyword :奄美, 伝統文様, 用途展開, 針突, 高倉

1. 緒 言

奄美群島は、鹿児島県本土の南方380～580kmの海上に点在し、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の8つの有人島がある。地理的にも歴史的にも独自の文化を育てており、固有の動植物だけでなく希少な文化や民俗などの宝庫である。また近年では、国際的希少種や固有種の生息・生育地であること、種多様性に富むサンゴ礁生態系が見られることから、国立公園の指定や世界自然遺産登録へ向け、注目されている。

しかし、国の伝統的工芸品の大島紬を除いて、地元の特徴ある工芸品などは少ない。そこで、針突の文様や奄美群島に残る他の文様（奄美の伝統的な建造物・高倉に施されている文様など）を調査収集し、その文様をデータ化・図形化する手法研究や文様を複合利用するなど新規文様を創出し、奄美群島の伝統文様を利用した商品開発の事例研究を行うことにした。

2. 針突の文様について

針突は、沖縄や奄美の女性の手の甲や手首に施されていた入墨の習慣で、明治の初め頃の禁止令が出るまで行われていた。入墨する動機として諸説あるが、針突を施すことは女性の憧れであった。そのため禁止令後も隠れて針突を施すこともあったようである。針突の文様は彫り師に対する謝礼やその集落によって微妙に異っている。

文様は手の指や手首など部位ごとに様々あり、文様のほとんどが魔除けを願ったものであるが、右手は親にしてもらい、左手は結婚後に配偶者にしてもらおうなど背景が奥深いものである¹⁾。図1に針突の入墨事例を示す。



図1 手に施された針突

3. 高倉の文様について

高倉とは、古代南方型建築様式で造られた高床式倉庫である。昔は、穀物などを湿気やネズミの害から守り保蔵する倉庫として使われていたが、現在では文化財指定を受け、保存されている。その高倉の入り口に、様々な文様が施されている。入り口中央に1個もしくは対象的に2個施したものが多くようである。針突文様と比べて、直線的で記号的な文様が特徴で、その意味合いは、東西南北を表したもののや外敵を防ぐ呪術的なものなど諸説あるが、当時は文字が読めない人も多かったとのことから表札的な意味合いが強いのではないかとする説が有力である²⁾。高倉に施された文様を図2に示す。

4. 針突文様や高倉文様の図形化

針突文様や高倉文様は、文献のままのデータを実際の商品に展開することは、現実的でないためベクター系ソフト (adobe製 Illustrator) にて再度図形化した後、用途展

*デザイン・工芸部 (現 企画支援部)

**大島紬部

***デザイン・工芸部 (現 研究主幹(企画支援担当))

開を行った。図形化に当たっては、文献などの資料を吟味し、図形の線の太さや図形と図形の間隔などはそのままとしたが、微妙な角度などは調整をし、用途展開時に活用できるようにした。図形化した針突文様を図3に、高倉文様を図4に示す。

5. 用途展開の事例

5. 1 染織製品への展開

奄美地域は、国の伝統的工芸品にも指定されている本場



図2 高倉に施された文様

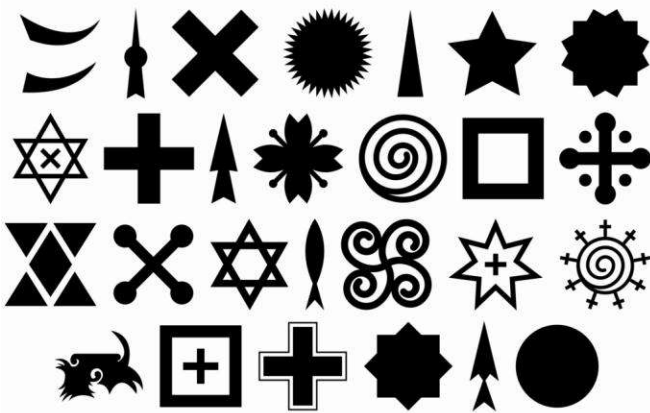


図3 図形化した針突文様

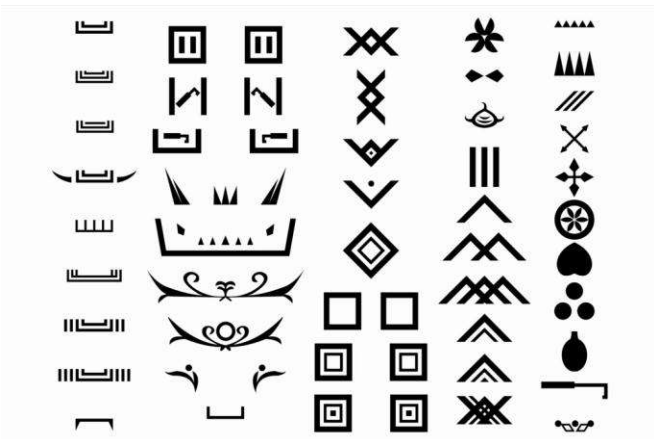


図4 図形化した高倉文様

奄美大島紬の産地として知られている。中でも染色の工程における泥染めは独特な技法で、大島紬に深く渋い色味を与えている。また島内には、草木染や藍染の染織企業が多くあり、企業における染色技法は様々であるが、絞り染めを多くの企業が活用している。そこで、新商品の提案として文様柄を利用した板締め染色を提案した。

染色用の型板の製作にはレーザー加工機を利用した。レーザー加工機を利用することで、複雑な形状も同一に加工できた。製作した型板は、防染用の型板としてだけではなく、抜染処理を行う際の型としても活用された。複数の企業で針突文様を施した商品が開発されただけでなく、針突をテーマとした商品の個展も開かれるなど様々な用途に展開された。

観光客などを対象にした体験染色を行う企業では、体験客に対して針突の風習や文様の意味などを説明した後、板締め染色による体験染色が行われた。奄美の文化面での背景を語ることができ、企業、観光客ともに好評であった。

また特産の奄美大島紬にも、文様が綾織りの組織として展開された。針突の持つ魔除けの意味と奄美に自生するフクギや長命草といった名前の特徴のある植物を染料として使用し、物語性のある草木泥染大島紬が製作され、販売された。文様を利用した染織製品などを図5から図11に示す。



図5 板締め染色用型板サンプル



図6 板締め染色を利用した染織製品（試作品）



図7 文様を複合利用した染織製品（藍染めタペストリー）



図8 文様を利用した染織製品（藍染めタペストリー）



図9 文様を利用した染織製品（藍染めタペストリー）



図10 文様を利用した草木泥染大島紬



図11 文様を利用した草木泥染大島紬 部分拡大図

5.2 木製品への展開

奄美大島は、リュウキュウマツやイタジイなどからなる約8万haという広大な森林面積を有し、豊富な樹種を利用して様々な工芸品が作られている。文様の木製品への展開には、レーザ加工機を利用し、試作品作りを行った。

針突は、本来手に施されていたことから、手を装飾するブレスレットなどを試作した。試作品を提示し、関心を持った企業からは針突文様をブレスレットだけでなく、アクセサリパーツとして、ネックレスやピアスなどにも展開したいとの声があった。そこで、新たに文様を複合利用するなどしてアクセサリの商品化を企業と共同で行った。店頭で、文様の意味などを説明すると、観光客だけでなく地元の人も必ず関心を持って購入していただけると好評である。開発した商品は、開発企業のブログやフリーペーパーで情報発信されている。木製品関連の商品を図12から図14に示す。

5.3 皮革製品への展開

皮革と大島紬とのコラボレーションを試みる企業から、皮革部分に針突文様や高倉文様を利用したいとの要望があり、技術提供を行った。木製品同様、革の切断にもレーザ



図12 文様を利用したアクセサリ



図13 文様を利用したネックレス



図14 店頭でのディスプレイ

加工機を用いた。商品アイテムは、ストラップ、キーホルダー、ネックレスなどである（図15、16）。文様の意味などを説明すると非常に興味を持っていただけるとのことで、店頭でも好評である。企業のブログでも情報発信され、奄美地域だけでなく県外での認知も広がっている。伝統文様について説明した商品タグも作成し、商品のバリエーションも今後増やしていく予定にしている。



図15 皮革を利用した商品群



図16 大島紬を挟んだキーホルダーやストラップ部分

6. 文様データの普及

本研究で蓄積されたデータは、広く普及させるという観点から、データとしての配布、もしくはWEBでダウンロードできるなどの方策を検討した。しかし作成したデータは、本来奄美固有の民俗性や風土性ゆえに創出されたものであるため、奄美地域の企業に活用してもらうことを考え、一般の方へのデータによる配布等を行わなかった。また、乱用を防ぐため、その活用方法と文様が呪術的な意味をもつことを充分に認識してもらった上で、紙媒体だけの配布をすることにした。

配布方法に関しては、今後も検討を行い、奄美地域への配慮を充分に行った上で、データの利用、活用を積極的に

行っていきたい。平成22年度研究成果発表会（奄美会場）における展示風景を図17, 18に示す。



図17 研究成果発表会（奄美会場）における展示



図18 研究成果発表会（奄美会場）における展示

7. 結 言

研究期間中は、奄美地域で育まれた伝統文様という点を考慮し、奄美地域の企業に絞って商品展開を行った。今回の研究で、地域文化を反映した文様を商品展開すると、強いアピール力を持つ商品を生むことがわかった。

魅力的な商品を作るためには、地域の特徴ある文化的要素が不可欠であると同時に、地理的にも歴史的にも奄美地域の持つ特異な文化は貴重な財産であると実感した。奄美伝統文様の認知度が上がれば、さらに商品展開できて、展開事例も増えると考え。今後は、奄美伝統文様のPRと活用事例の拡大を図ると同時に、県内で、奄美地域以外に現存する地域固有の文様を調査し、展開事例を研究することで、県内産業の振興に努めていきたい。

謝 辞

研究を進めるに当たり、針突文様の情報を提供していただいた山下文武氏、山岡英世氏（奄美民俗研究家）、また、製作にご協力いただいた肥後染色（肥後純一氏）、（有）金井工芸（金井志人氏）、花ろまん染色工房（安田謙志氏）、積染色工芸（積良一氏）、AL0ALOyellow（永田治美氏）、川畑呉服店（川畑裕徳氏）に感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) 山下文武：奄美の針突—消えた入墨習俗，まろうど社（2003）
- 2) 高橋雅人：日本のしるし 1 家のしるし，岩崎美術社（1973）

